

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病虫害発生予報第 4 号 (6 月)

予報の概要

作物名	病虫害名	予想発生量 < 平年比 (前年比) >	作物名	病虫害名	予想発生量 < 平年比 (前年比) >
イ ネ	葉いもち	<u>やや多</u> (やや多)	チ ャ	チャノキイロアザミウマ	山城 : やや少 (やや少) 丹波 : 並 (やや多) 丹後 : 並 (やや多)
	ニカメイチュウ (第 1 世代)	並 (並)		カンザワハダニ	山城 : <u>やや多</u> (多) 丹波 : 並 (多) 丹後 : <u>やや多</u> (多)
	ヒメトビウンカ	並		チャノミドリヒメヨコバイ	山城 : 並 (並) 丹波 : 並 (やや少) 丹後 : 並 (やや少)
	縞葉枯病	並 (やや少)		クワシロカイガラムシ	山城 : やや少 (やや少) 丹波 : 並 (少) 丹後 : やや少 (やや少)
ツマグロヨコバイ	並 (やや少)				
イネミズゾウムシ	<u>やや多</u> (やや多)				
ナ シ	黒斑病	<u>多</u> (やや多)		疫病・褐色腐敗病	並 (並)
	黒星病	<u>やや多</u> (やや多)		べと病	並 (やや少)
ブドウ	ハダニ類	並 (やや多)		斑点細菌病	並 (並)
	カキ	並	うどんこ病	並 (並)	
カキ	うどんこ病	<u>多</u> (やや多)	ネギ	さび病 ネギハモグリバエ ネギアザミウマ	<u>やや多</u> (並) やや少 (並) <u>やや多</u> (多)
カンキツ	ハダニ類	並 (多)	野菜類	アブラムシ類と モザイク病	並 (並)
果樹全般	カメムシ類	<u>やや多</u> (並)	果菜類	ハダニ類 アザミウマ類	<u>やや多</u> (やや多) <u>やや多</u> (多)
チ ャ	炭疽病	山城 : 並 (やや多) 丹波 : 並 (多) 丹後 : 並 (少)	アブラナ 科野菜	コナガ	並
	もち病	山城 : <u>やや多</u> (やや少) 丹波 : 並 (並) 丹後 : 並 (並)			
	チャノコカクモンハマキ	山城 : やや少 (やや少) 丹波 : <u>やや多</u> (やや多) 丹後 : <u>やや多</u> (並)			
	チャノホソガ	山城 : 並 (やや少) 丹波 : 並 (並) 丹後 : 並 (やや多)			

※平年とは過去 10 年の平均である。

目 次

予報の概要	1
予報本文	2
今後注意すべきその他の病虫害等	18
参考	
I 近畿地方の気象の 1 か月予報	19
II 用語の定義	19
III 予報本文の見方	20

農作物病虫害情報サービス

ホームページ

<https://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

QR コード



※QR コードは株式会社
デンソーウェーブの登録商標です

予報本文

イネ

1 葉いもち

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、補植用苗での発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
確認ほ場率(%)	0.0	0.0

(2) 前年の穂いもちの発生量は平年比やや多い（+）。

項目	前年9月	平年値
発病株率(%)	25.0	7.7
確認ほ場率(%)	58.3	28.7

(3) 向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 空気伝染し、発病適温は14～30℃（最適25℃）である。降雨あるいは霧などによって長時間イネが濡れ続ける場合は感染に好適である。湿度が高いと病斑が進展したり、胞子の形成量が高まったりする。
- (2) 通常、6月第5半旬頃が初発時期である。
- (3) 補植用苗をそのまま放置すると、葉いもちの発生源となる。補植後、速やかに残り苗を処分する。
- (4) ほ場を見回り、肥料がムラ効きしているところを中心に、下葉に発病していないかどうか調べる。特に、畑作跡では注意する。
- (5) 長期持続型箱施用剤を使用していない多肥田や山間、山沿い等の発生しやすいほ場では、曇雨天が続く場合、6月中旬頃に予防のため粒剤などを施用する。

2 ニカメイチュウ（第1世代）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 前年8月の第2世代幼虫の発生は認めていない（平年並）。

項目	前年8月	平年値
被害株率(%)	0.0	0.0

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、越冬世代成虫の発生最盛期は6月第4半旬頃である。
- (2) 稲ワラや刈り株等で幼虫越冬し、年2回発生する。
- (3) 稲ワラ（敷ワラ）を使用する野菜・チャ・イチジク栽培地域等で発生しやすい。
- (4) 6月末に葉鞘変色茎の割合が全体の5%以上の場合、そのまま放置すると経済的被害が発生する。

3 ヒメトビウンカと縞葉枯病

予報内容 発生量：ヒメトビウンカ 平年並
縞葉枯病 平年並

予報の根拠

- (1) ヒメトビウンカの越冬虫は丹後で平年比やや多い発生を認めたが(+)、府全般では平年並であった。

項目	本年	平年値
虫数(匹)	0.1	0.3
確認ほ場率(%)	6.7	14.0

* 虫数は、20回振りすくい取り調査。

- (2) 前年は、縞葉枯病の発生を認めていない。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ヒメトビウンカはイネ科雑草で越冬するため、前年の発生状況等が翌年の発生に影響する。
(2) 通常、ヒメトビウンカ第1世代成虫の発生最盛期は6月第3半旬頃である。
(3) 縞葉枯病は、ヒメトビウンカにより媒介され経卵伝染する。

4 ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) ツマグロヨコバイの越冬虫数、確認ほ場率は丹後で平年比やや多く(+)、府全般では平年並であった。

項目	本年	平年値
虫数(頭)	0.5	1.2
確認ほ場率(%)	27.8	25.1

* 虫数は、20回振りすくい取り調査。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 4 齢幼虫でイネ科雑草において越冬する。
(2) 直接吸汁加害する他、萎縮病等を媒介する。

5 イネミズゾウムシ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 前年の新成虫の予察灯への誘殺数は、亀岡で平年比やや多く(+)、京田辺で平年比やや少なく(-)、京丹後で平年並。

地域	7月1半旬～8月6半旬の誘殺数(頭)	
	3年	平年値
京田辺市	32	51.1
亀岡市	206	191.1
京丹後市	47	44.0

- (2) 5月中旬現在、本田での発生量は平年比多い(+)

項目	本年	平年値
食害株率(%)	54.3	25.0
虫数(頭/25株)	9.6	2.7
確認ほ場率(%)	93.8	63.1

- (3) 越冬世代成虫の予察灯への初飛来は京田辺で平年比やや早く、亀岡、京丹後で早かった。

地域	予察灯への初飛来日	
	本年	平年値
京田辺市	5月11日	5月14日
亀岡市	4月23日	5月5日
京丹後市	4月25日	5月17日

(4) 5月第3半旬現在、越冬世代成虫の予察灯への誘殺数は平年並。

地域	4月1半旬～5月3半旬の誘殺数(頭)	
	本年	平年値
京田辺市	1	1.0
亀岡市	29	117.2
京丹後市	23	20.7

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 前年の新成虫が越冬し、田植え後、水田に侵入して葉を食害する。5月中下旬から卵を産む。
- (2) ふ化した幼虫が土中で根を食害する。
- (3) イネが根腐れするような水田では幼虫の被害が出やすいので、深水を避け、根を健全に保つ。
- (4) 浅水管理は成虫の産卵行動を阻害し、産卵場所を制限する効果がある。
- (5) 粒剤の育苗箱施用の効果が高い。なお、イネドロオイムシの常発地では、この方法でイネドロオイムシも合わせて防除ができる。
- (6) 育苗箱施用剤を使用しなかった場合や田植え後発生が多く、成虫が株当たり0.3頭を越える場合は、そのまま放置すると経済的被害が発生するので、薬剤散布を行う。

※今後注意すべきその他の病害虫等はp.18を参照

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年比多い（前年比やや多い）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在の発生量は平年比多い（+）。

項目	本年	平年値
発病葉率（%）	4.0	0.6
発生ほ場率（%）	75.0	30.7

(2) 向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並か多い(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 葉が繁茂する梅雨期は、本病感染の最盛期であり、降雨が続くと被害が多くなる。薬剤防除を徹底する。
- (2) 果実の感染を防ぐため、大袋掛けは小袋が破れる前に必ず行う。

詳細は、令和4年4月20日付け「防除所ニュース第1号」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news2022_01.pdfを参照のこと。

2 ナシ 黒星病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、発生量は平年並。

項目	本年	平年値
発病葉率（%）	0.2	0.4
発生ほ場率（%）	20.0	14.0

(2) 向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並か多い(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発病適温は15～25℃である。
- (2) 雨が降り続き、低温が続くと発生が多くなる。
- (3) 赤ナシは発病しやすいので、予防的に防除する。
- (4) 幼果や葉の発病を発見したら、取り除いてほ場外に持ち出し処分する。

詳細は、令和4年4月20日付け「防除所ニュース第1号」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news2022_02.pdfを参照のこと。

3 ブドウ ベと病

予報内容 発生量：平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、調査ほ場内で発生を認めていない(平年並)。

項目	本年	平年値
発病葉率 (%)	0.0	0.0
発生ほ場率 (%)	0.0	1.8

- (2) 向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 初発生は、葉より花穂からの場合が多い。
- (2) 発病適温は22～25℃である。
- (3) 5～6月に多雨であると多発生となる。
- (4) ハウス栽培では、過繁茂を避け通風をよくする。
- (5) 本病は新しく柔らかい組織に発生しやすいため、窒素肥料の多施用は避ける。

4 カキ 落葉病

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

- (1) 前年10月の調査では、調査ほ場内で発生を認めていない(平年並)。

項目	前年10月	平年値
発病葉率 (%)	0.0	2.4
発生ほ場率 (%)	0.0	26.7

- (2) 向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 角斑落葉病と円星落葉病があり、前者の発病は7月から、後者は9月から見られる。主な感染時期は前者が6月中旬から7月中旬で、後者が5月下旬から7月上旬である。前年の被害葉(落葉)に形成された前者は分生子、後者は子のう胞子が第一次伝染源となる。降雨の多い年ほど被害が多い。
- (2) 慣行防除が行われている園では被害が少ない。

5 カキ うどんこ病

予報内容 発生量：平年比多い（前年比やや多い）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、発生量は平年比やや多い(+)。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	3.7	1.3
発生ほ場率(%)	66.7	43.3

(2) 前年10月の発生量は平年比やや多い(+)。

項目	前年10月	平年値
発病葉率(%)	58.0	38.7
発生ほ場率(%)	100.0	96.7

(3) 向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 前年の被害葉(落葉)や枝・幹の表面上に形成された子のう殻内の子のう胞子が第一次伝染源となり、5～6月から発病が見られる。
- (2) 5～6月に降雨の多い年ほど被害が多い。

6 ナシ、カンキツ ハダニ類

予報内容 発生量：ナシ 平年並(前年比やや多い)
カンキツ 平年並(前年比多い)

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、発生量はナシでは発生を認めず(平年並)、カンキツでは平年並。

作物	項目	本年	平年値
ナシ	寄生葉率(%)	0.0	0.1
	発生ほ場率(%)	0.0	3.7
カンキツ	寄生葉率(%)	2.3	4.6
	発生ほ場率(%)	66.7	53.3

(2) 向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) カメムシ類等を防除するために、合成ピレスロイド系薬剤を連用した園では、天敵も減少するために、ハダニ類が多発する場合がありますので注意する。
- (2) 年間世代数が多く、薬剤抵抗性が発達しやすいので、同系統のダニ剤の連用は避ける。

7 果樹全般 カメムシ類

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年並)

予報の根拠

(1) チャバネアオカメムシの越冬量は、丹波、丹後地域で平年並、山城地域で平年比やや多い。

地域	本年	平年値(例年値)
山城	0.50	(0.81)
丹波	0.23	0.32
丹後	0.25	0.27

※平均生存個体数(頭/地点)

(2) 5月中旬現在、ナシでの被害は平年並。

項目	本年	平年値
被害果率 (%)	0.0	2.0
被害ほ場率 (%)	0.0	5.6

(3) 5月第3半旬現在、チャバネアオカメムシの予察灯 (BL) への誘殺は京田辺市でやや多く (+)、亀岡市で平年並、京丹後市で多い (+)。

場所	本年	平年値
京田辺市	4	1.7
亀岡市	0	1.9
京丹後市	30	4.0

※誘殺数：5月第1半旬～5月第3半旬の合計値

(4) 5月第3半旬現在、チャバネアオカメムシのフェロモントラップへの誘殺は京田辺市で平年比多く (+)、亀岡市で平年並、京丹後市で平年比やや少ない。

場所	本年	平年値
京田辺市	5.4	0.4
亀岡市	9.4	10.3
京丹後市	0.0	1.5

※誘殺数：5月第1半旬～5月第3半旬の合計値

(5) 5月第3半旬現在、ツヤアオカメムシの予察灯 (BL) への誘殺は京田辺市でやや多く (+)、亀岡市では認めておらず (平年並)、京丹後市で平年比多い。
(+)

場所	本年	平年値
京田辺市	3.2	2.0
亀岡市	0.0	0.0
京丹後市	2.0	0.0

※誘殺数：5月第1半旬～5月第3半旬の合計値

(6) 5月第3半旬現在、クサギカメムシの予察灯 (BL) への誘殺は京田辺市、亀岡市では認めておらず (平年並)、京丹後市で平年比やや多い。(+))

場所	本年	平年値
京田辺市	0.0	0.0
亀岡市	0.0	0.0
京丹後市	2.0	0.5

※誘殺数：5月第1半旬～5月第3半旬の合計値

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 園外から飛来し局地的に発生するので、特に山林などの隣接園では注意する。
- (2) 夜行性であるため、夕方の防除が効果的である。
- (3) 合成ピレスロイド系薬剤の連用は、ハダニ類やカイガラムシ類の多発を招く場合があるので、注意が必要である。

*** 今後注意すべきその他の病害虫等は p. 18 を参照**

チャ

1 炭疽病

予報内容 発生量：山城 平年並（前年比やや多い）
丹波 平年並（前年比多い）
丹後 例年並（前年比少ない）

予報の根拠

（１）５月中旬現在、山城で平年並、丹波で発生を認めず（平年並）、丹後で例年並。

地域	項目	本年	平年値
山城	発病葉数（㎡当たり）	0.5	0.9
	発生ほ場率（％）	30.0	32.5
丹波	発病葉数（㎡当たり）	0.0	0.1
	発生ほ場率（％）	0.0	3.3
丹後	発病葉数（㎡当たり）	0.5	0.8
	発生ほ場率（％）	25.0	13.9

（２）向こう１カ月の気温は平年並、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）伝染源は、摘採されずに残った前茶期の病葉である。
- （２）本病が感染するのは新葉に限られ、新芽生育期に降雨が続くと発生が多くなる。
- （３）防除適期は、二番茶芽の第１～２葉開葉期である。

2 もち病

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや少ない）
丹波 平年並（前年並）
丹後 平年並（前年並）

予報の根拠

（１）５月中旬現在、発生量は山城で平年比多く（＋）、丹波及び丹後では発生を認めていない（平年並）。

地域	項目	本年	平年値
山城	発病葉数（㎡当たり）	0.1	0.0
	発生ほ場率（％）	5.0	0.5
丹波	発病葉数（㎡当たり）	0.0	0.0
	発生ほ場率（％）	0.0	0.0
丹後	発病葉数（㎡当たり）	0.0	0.0
	発生ほ場率（％）	0.0	0.0

（２）前年１０月の発生量は、山城で平年比やや多く（＋）、丹波で平年並、丹後では認めなかった（平年並）。

地域	項目	前年10月	平年値
山城	発病葉数（㎡当たり）	1.8	1.7
	発生ほ場率（％）	18.2	2.7
丹波	発病葉数（㎡当たり）	0.0	1.7
	発生ほ場率（％）	16.7	10.0
丹後	発病葉数（㎡当たり）	0.0	0.0
	発生ほ場率（％）	0.0	0.0

- (3) 向こう1カ月の気温は平年並、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病斑上に形成された担子胞子が風雨で飛散し、二番茶の新芽に感染する。
 (2) 気温20℃前後で湿度が高く、日照不足の条件下で多発する。
 (3) 常発地や一番茶摘採後に病葉が認められる園では注意する。

3 チャノコカクモンハマキ

予報内容	発生量：山城	平年比やや少ない（前年比やや少ない）
	丹波	平年比やや多い（前年比やや多い）
	丹後	例年比やや多い（前年並）
	次世代幼虫ふ化時期：	
	山城	6月第4半旬～6月第6半旬（平年比早い）
	丹波	6月第6半旬～7月第2半旬（平年比やや遅い）
	丹後	7月第1半旬～7月第3半旬（例年比やや遅い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、山城、丹波で発生を認めず（平年並）、丹後でも発生を認めていない（例年並）。
 (2) 前年10月の発生は山城でやや少なく（－）、丹波及び丹後で平年並。

地域	項目	前年10月	平年値
山城	綴葉数（㎡当たり）	0.1	0.1
	幼虫数（㎡当たり）	0.0	0.0
	発生ほ場率（％）	9.1	2.8
丹波	綴葉数（㎡当たり）	0.3	0.2
	幼虫数（㎡当たり）	0.0	0.0
	発生ほ場率（％）	33.3	7.3
丹後	綴葉数（㎡当たり）	0.0	0.2
	幼虫数（㎡当たり）	0.0	0.1
	発生ほ場率（％）	0.0	3.7

- (3) フェロモントラップへの誘殺数は宇治市で平年比やや少なく（－）、綾部市では平年比やや多く（＋）、京丹後市では例年比やや多い（＋）。

場所	項目	本年	平年値
宇治市	誘殺数（頭）	629.2	1708.7
綾部市	誘殺数（頭）	708.8	622.8
京丹後市	誘殺数（頭）	23.5	17.3

※誘殺数（頭）：4月第4半旬～5月第3半旬計

- (4) フェロモントラップへの誘殺盛期は宇治市で平年比早く、綾部市で平年比やや遅く、京丹後市で例年比やや遅い。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、第1世代幼虫ふ化期は5月末～6月始めで、年4回世代を繰り返す。
 (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤が掛かりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。
 (3) 近年、山城地域においてジアミド系及びIGR剤に抵抗性を発達させた個体群の発生が確認されている。そのため、これらの薬剤の効果が低いと感じられる場合は使用を中止し、他系統の薬剤を使用する。

4 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平年並（前年比やや少ない）
丹波 平年並（前年並）
丹後 例年並（前年比やや多い）

次世代幼虫ふ化時期：

山城：6月第2半旬～6月第3半旬（平年並）
丹波：6月第5半旬～6月第6半旬（平年比遅い）
丹後：7月第1半旬～7月第2半旬（例年比遅い）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、第1世代の発生量は山城、丹波で平年並、丹後で発生を認めず（例年並）。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生芽率（%）	0.0	1.3
	巻葉数（㎡当たり）	0.1	0.2
	発生ほ場率（%）	5.6	14.5
丹波	寄生芽率（%）	0.0	0.1
	巻葉数（㎡当たり）	1.0	0.5
	発生ほ場率（%）	33.3	19.3
丹後	寄生芽率（%）	0.0	1.2
	巻葉数（㎡当たり）	0.0	0.6
	発生ほ場率（%）	0.0	31.5

(2) フェロモントラップへの誘殺数は宇治市、綾部市で平年並、京丹後市では例年比多い（+）。

場所	項目	本年	平年値
宇治市	誘殺数（頭）	160.1	478.4
綾部市	誘殺数（頭）	491.1	987.3
京丹後市	誘殺数（頭）	620.8	162.1

※誘殺数（頭）：4月第4半旬～5月第3半旬計

(3) フェロモントラップへの誘殺盛期は宇治市で平年並、綾部市で平年比遅く、京丹後市では例年比遅い。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、年5回世代を繰り返し、5月下旬～6月中旬に第1世代成虫が発生し産卵する。
- (2) 卵は3～7日でふ化し、新芽を加害する。
- (3) 第2世代幼虫の発生時期と二番茶の生育が重なるため、被害が大きくなるので注意する。

5 チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少（前年比やや少）
丹波 平年並（前年比やや多）
丹後 例年並（前年比やや多）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、発生量は山城では少なく（-）、丹波で発生を認めず（平年並）、丹後でも発生を認めなかった（例年並）。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生・被害芽率 (%)	0.2	2.4
	発生ほ場率 (%)	8.3	32.1
丹波	寄生・被害芽率 (%)	0.0	0.6
	発生ほ場率 (%)	0.0	19.2
丹後	寄生・被害芽率 (%)	0.0	1.7
	発生ほ場率 (%)	0.0	33.3

(2) 向こう1カ月の気温は平年並、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に二番茶以後に増加し、夏秋芽を吸汁加害する。
- (2) 多雨により発生は減少するが、生息密度が高いと多少の雨では影響が小さい。
- (3) 一番茶期に密度が高かった地域では、二番茶の萌芽期から開葉期に十分注意する。
- (4) ネオニコチノイド系、有機リン系などの薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、同系統薬剤の連用を避ける。

6 カンザワハダニ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比多い）
丹波 平年並（前年比多い）
丹後 例年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、発生量は山城でやや多く（+）、丹波で発生を認めず（平年並）、丹後では例年比やや多い（+）。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生葉率 (%)	1.5	1.1
	寄生虫数 (100葉当たり)	5.6	4.0
	発生ほ場率 (%)	14.3	20.3
丹波	寄生葉率 (%)	0.0	0.3
	寄生虫数 (100葉当たり)	0.0	0.4
	発生ほ場率 (%)	0.0	5.3
丹後	寄生葉率 (%)	4.5	0.8
	寄生虫数 (100葉当たり)	12.5	4.8
	発生ほ場率 (%)	50.0	13.9

(2) 向こう1カ月の気温は平年並、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 5～6月に多発し、10～30℃の範囲では高温の時ほど繁殖力は高いが、降雨により増殖が抑制される。
- (2) 通常、葉の裏側に生息するので、薬剤は葉の裏側にかかるように丁寧に散布する。

7 チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 発生量：山城 平年並（前年並）
丹波 平年並（前年比やや少ない）
丹後 例年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、発生量は山城で平年並、丹波で発生を認めず（平年並）、丹後で発生を認めていない（例年並）。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生・被害芽率 (%)	0.3	0.4
	発生ほ場率 (%)	16.7	10.7
丹波	寄生・被害芽率 (%)	0.0	0.3
	発生ほ場率 (%)	0.0	9.5
丹後	寄生・被害芽率 (%)	0.0	0.0
	発生ほ場率 (%)	0.0	0.0

(2) 向こう1カ月の気温は平年並、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、二番茶期以降、発生が多くなる。
- (2) 二番茶の萌芽期から開葉期に加害されると、新芽の生育が著しく悪くなるので注意する。
- (3) ネオニコチノイド系、有機リン系などの薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、同系統薬剤の運用を避ける。

8 クワシロカイガラムシ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない（前年比やや少ない）
丹波 平年並（前年比少ない）
丹後 例年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、発生量は山城で平年比やや少なく（－）、丹波で平年並、丹後で例年比やや少ない（－）。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生株率 (%)	5.3	12.6
	発生ほ場率 (%)	15.0	48.0
丹波	寄生株率 (%)	9.2	7.0
	発生ほ場率 (%)	16.7	35.7
丹後	寄生株率 (%)	8.3	17.2
	発生ほ場率 (%)	33.3	72.2

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間3回（一部山間部では2回）発生する。5月下旬頃の第1回目の幼虫ふ化期は時期が比較的揃っているため、この世代のふ化幼虫を対象とする防除は一年中で最も効果的である。なお、標高の高いところではふ化が10日程度遅れる。
- (2) 薬剤は株内部の枝に十分かかるように、1000リットル/10アール散布する。

- (3) プルートMCを散布した茶園では、薬剤散布の必要はない。
- (4) 寄生が著しい茶園では、一番茶後すみやかに中切り、深刈りを実施し樹勢の回復を図る。

*** 今後注意すべきその他の病虫害等は p. 18 を参照**

野菜

1 果菜類 疫病・褐色腐敗病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、トマトおよびナスで発生を認めていない。
- (2) 向こう1カ月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌は水媒伝染するので、ほ場の排水に努める。特に、降雨時の地表水を速やかに排水する。
- (2) マルチを行い、泥によるはね上げ伝染を防ぐ。また、溝に落ちて浸水したと思われる蔓は摘除して、ほ場外へ持ち出し処分する。

2 キュウリ ベと病

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発病株率 (%)	0.0	0.1
発生ほ場率 (%)	0.0	3.3

- (2) 向こう1カ月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 曇雨天が続くと、初発生及びまん延期が早くなる。
- (2) 肥切れしたり草勢が衰えると発病が多くなるので、肥培管理に注意する。

3 キュウリ 斑点細菌病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発病株率 (%)	0.0	1.0
発生ほ場率 (%)	0.0	10.8

- (2) 向こう1カ月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 降雨等により病原細菌が飛散し、葉及び果実の気孔等から侵入して発病する機会が多い。

- (2) 曇雨天が続くと急速にまん延するので、気象の変化に注意する。
- (3) 発生してからでは防除が困難となるので、予防防除に努める。

4 果菜類 うどんこ病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、ナス及びキュウリで発生を認めていない（平年並）。

作物	項目	本年	平年値
キュウリ	発病株率 (%)	0.0	0.0
ナス	発病株率 (%)	0.0	0.0

- (2) 向こう1カ月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 初発生時期が早いと多発し、被害が大きくなる。
- (2) 施設栽培で発生しやすく、高温乾燥天候が続くと発生が多くなる。
- (3) 過繁茂を避け、肥培管理に注意する。

5 ネギ さび病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は小株で平年比やや多く（+）、大株で平年並。

株の種類*	項目	本年	平年値 (例年値)
小株	発病株率 (%)	1.5	4.5
	発生ほ場率 (%)	37.5	14.0
大株	発病株率 (%)	4.0	(6.3)
	発生ほ場率 (%)	16.7	(19.1)

*小株：葉長40cm未満、大株：葉長40cm以上

- (2) 向こう1カ月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 春季と秋季に比較的低温で降雨が多いと多発する傾向がある。また、前年の秋に多発して、冬が温暖多雨に経過すると、春に多発する。
- (2) 肥切れや窒素肥料のやり過ぎは発生を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (3) 被害葉は伝染源となるので、ほ場周辺に放置せず、適切に処分する。

6 野菜類 アブラムシ類とモザイク病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、アブラムシ類の発生量はキュウリでやや多く（+）、ナス及びキャベツでやや少なく（-）、ネギで平年並。

作物	項目	本年	平年値
キュウリ	寄生虫数(頭/葉)	0.05	0.09
	寄生葉率(%)	4.7	7.3
ナス	寄生虫数(頭/葉)	0.04	0.34
	寄生葉率(%)	2.1	14.6
キャベツ	寄生虫数(頭/10株)	0.2	10.5
	寄生株率(%)	2.0	20.5
ネギ	寄生虫数(頭/株)	0.01	0.03
	寄生株率(%)	0.5	2.7

(2) 5月第3半旬現在、黄色水盤への誘殺数は平年並。

項目	本年	平年値
黄色水盤誘殺虫数(頭)	35.0	70.3

* 誘殺数(頭) : 4月第4半旬~5月第3半旬の合計値

(3) 向こう1カ月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、モザイク病を媒介するものもいる。
- (2) 通常、無翅虫で集団加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散し、発生が拡大する。
- (3) 高温乾燥が続くと発生が多くなる。
- (4) キュウリの急性萎凋症の発生の多いところでは、アブラムシ類の飛来に特に注意するとともに、ワクチン苗の利用も考慮する。

7 果菜類 ハダニ類

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比やや多い)

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、キュウリで平年比多く(+)、ナスで平年比やや多い(+)

作物	項目	本年	平年値
キュウリ	寄生虫数(頭/葉)	0.03	0.01
	寄生葉率(%)	2.7	0.5
ナス	寄生虫数(頭/葉)	0.02	0.04
	寄生葉率(%)	1.3	0.7

(2) 向こう1カ月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 高温乾燥が続くと、発生が増加する。
- (2) ハウス栽培では、天候に関わらず増殖しやすい。
- (3) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

8 果菜類 アザミウマ類

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比多い)

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、発生量はキュウリで平年比多く(+)、ナスで平年比やや多い(+)

作物	項目	本年	平年値
キュウリ	寄生虫数(頭/葉)	2.28	0.68
	寄生葉率(%)	60.7	29.8
ナス	寄生虫数(頭/葉)	0.11	0.13
	寄生葉率(%)	5.4	4.7

(2) 向こう1カ月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アザミウマ類には直接加害するだけでなく、ミカンキイロアザミウマやネギアザミウマ等ウイルス病を媒介する種もいる。
- (2) ハウスや雨よけ栽培では高温乾燥が続くと、特に多発しやすいので注意する。
- (3) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

9 アブラナ科野菜 コナガ

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、キャベツでの発生は平年並。

作物	項目	本年	平年値
キャベツ	幼虫・蛹数(／10株)	0.4	1.5
	寄生株率(%)	4.0	10.9

- (2) フェロモントラップへの誘殺数は、京田辺市で例年並、亀岡市及び京丹後市で平年並。

場所	項目	本年	平年値(例年値)
京田辺市	誘殺数(頭)	1.7	(1.3)
亀岡市	誘殺数(頭)	11.3	11.7
京丹後市	誘殺数(頭)	7.3	9.2

※ 誘殺数(頭)は4月第4半旬～5月第3半旬の合計値

京田辺市は平成27年～令和3年の例年値

- (3) 予察灯60Wへの誘殺数は、京田辺市で平年並、亀岡市で平年比やや多く(+)、京丹後市で平年比やや少ない(-)。

場所	項目	本年	平年値
京田辺市	誘殺数(頭)	2	3.1
亀岡市	誘殺数(頭)	5	3.4
京丹後市	誘殺数(頭)	0	2.6

※ 誘殺数(頭)は4月第4半旬～5月第3半旬の合計値

- (4) 向こう1カ月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 防虫ネット等を利用し、物理的防除に努める。
- (2) 発生回数が多く(10～12回/年)、各発育段階(卵、幼虫、蛹、成虫)が混在する。

10 ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年並）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、発生量は小株で平年比少なく、大株で例年比少ない（－）。

株の種類*	項目	本年	平年値（例年値）
小株	被害株率（%）	1.5	28.8
	発生ほ場率（%）	25.0	57.8
大株	被害株率（%）	0.0	(8.2)
	発生ほ場率（%）	0.0	(50.8)

*小株：葉長40cm未満、大株：葉長40cm以上

(2) 向こう1カ月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 産卵から羽化までの発育所要日数は20℃で約36日、25℃で約23日程度である。
- (3) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (4) 1葉あたり1～数匹の幼虫が加害するバイオタイプA（従来系統）とは異なり、10匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプB（別系統）の発生を確認しているので注意する。

詳細は平成31年3月13日付け「発生予察特殊報第1号」を参照。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu201803_1.pdf

11 ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

(1) 5月中旬現在、発生量は小株で平年並、大株で例年比やや多い（＋）。

株の種類*	項目	本年	平年値（例年値）
小株	被害株率（%）	82.0	77.4
	発生ほ場率（%）	100.0	90.0
大株	被害株率（%）	100.0	(90.7)
	発生ほ場率（%）	100.0	(100.0)

*小株：葉長40cm未満、大株：葉長40cm以上

(2) 向こう1カ月の気温は平年並、降水量は平年並か多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) 本種はアイリス黄斑ウイルス（Iris yellow spot virus：IYSV）による病害でネギえそ条斑病を媒介する。
- (3) 薬剤散布の他、赤色系防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。
- (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (5) 本種は、殺虫剤感受性低下が懸念されている。殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤を散布する。また、感受性

- の低下を避けるため、系統の異なる殺虫剤をローテーション散布する。
- (6) 産雄性生殖系統と産雌性生殖系統の殺虫剤感受性は異なるので、産雄性生殖系統が優占している地域（山城及び南丹地域）では注意する。

詳細は平成29年3月27日付「防除所ニュース平成29年第3、4号」

技術資料「ネギえそ条斑病防除マニュアル」

技術資料「ネギ栽培における赤色系防虫ネット技術マニュアル」を参照。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news3go_iysv_negiazamiума.pdf

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news4go_negiazamiうmakeitou_hoka.pdf

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negi_iysv-manual_20200124-forhp.pdf

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negi_redcolor-net_manual.pdf

今後注意すべきその他の病害虫等

発生量を予報していない病害虫について、発生生態及び防除上注意すべき事項を掲載しています。

イネ

1 スクミリングガイ

- (1) 苗を移植する前に、田面を細かく耕うんし、越冬した大きな貝を殺す。
- (2) 水路からの侵入を防止するため、取水口に9mm目合程度のネットなどを設置する。
- (3) 耕うんや代掻きの時に農業機械がほ場間を移動する場合には、機械に付着した貝を移動させないように、都度洗浄を行う。
- (4) 前年の被害が大きかったほ場に移植する苗には、箱施用剤を使用する。

詳細は令和3年4月2日付け「防除所ニュース第3号」を参照。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news2021_03.pdf

果樹

1 カキノヘタムシガ、カキクダアザミウマ

果実の被害を防ぐため、開花終了後から6月下旬にかけて防除する。

2 ブドウ 灰色かび病

- (1) 発病適温は23℃前後で、開花前に降雨が続くと、突発的に発生することがある。
- (2) 開花前からハウス栽培では換気に努め、予防散布を徹底する。
- (3) 果粒に付着した花がらは、速やかに落とす。

チャ

1 ツマグロアオカスミカメ

地域によって一番茶期に加害するもの、二番茶期に加害するもの、両方の茶期に加害するものがある。薬剤散布は萌芽期及び一葉期に行う。

2 チャトゲコナジラミ

5月中旬の巡回調査で発生園を認めた。ほ場をよく見回り、発生の多い園では注意する。

本種の農薬による防除適期は若齢幼虫期である。成虫発生期の散布では密度抑制効果が不十分であるため、成虫の飛翔が落ちついた頃を見計らって薬剤散布を行う。

参 考

I 近畿地方の気象の1か月予報

(5月21日から6月20日までの天候見通し)

令和4年5月19日
大阪管区気象台発表

<予想される向こう1か月の天候>

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

前線や湿った空気の影響を受けやすく、向こう1か月の気温は平年並の見込みです。前半は天気が数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。後半は平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

週別の気温は、1週目は平年並の確率50%、2週目は平年並または高い確率40%、3～4週目は平年並または高い確率40%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	30	30	40
降水量(日本海側)	20	40	40
降水量(太平洋側)	20	40	40
日照時間	40	40	20

病虫害防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並が多く、日照時間は平年並か少ないと予想されている。」としました。

II 用語の定義

1 半旬のとり方

第1半旬 第2半旬 第3半旬 第4半旬 第5半旬 第6半旬
各月の 1～5日 6～10日 11～15日 16～20日 21～25日 26～最終日

2 発生量――病虫害の発生程度と広がりの両面を加味したものをいう。

3 平年値――原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

Ⅲ 予報本文の見方

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
 丹波 平年並（前年並）
 丹後 例年並（前年並）

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比で示しています。
- ・平年比の見方は、「Ⅱ 用語の定義、4 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は予想月の前年の発生量（時期）との比較です。
- ・必要に応じて地域別に示します。

予報の根拠

- （1）前年10月の発生量は、山城、丹波、丹後で平年並の発生。
- （2）4月中旬現在、山城で平年比多く（+）、丹波、丹後で発生を認めていない（平年（例年）並）。

地域	項目	4月の調査結果	4月 平年値
山城	綴葉数(/㎡)	3.0	0.1
	幼虫数(/㎡)	0.5	0.0
	発生ほ場率(%)	22.7	3.7
丹波	綴葉数(/㎡)	0.0	0.5
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	11.7
丹後	綴葉数(/㎡)	0.0	0.0
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0

- ・「予報の根拠」として直近の巡回調査のデータの中で主だったものを示しています。平年値も記載しているので、防除等の目安としてください。

- （3）4月中旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、宇治で平年比少ない（-）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。
- （2）通常、第1回目のふ化期は5月末～6月始めで、4回世代を繰り返す。
- （3）ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップや予察灯への誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の予測の根拠となった事項を記載しています。
- ・文中の（-）、（+）は、予測される発生量に影響を及ぼすと考えられるもので、（-）の場合発生が少なくなると考えられる要因、（+）は発生量が多くなると考えられる要因を示しています。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除方法の留意事項、要防除水準等を示しています。

※病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター		電話番号一覧
・ 京 都 乙 訓	農業改良普及センター	0 7 5 - 3 1 5 - 2 9 0 6
・ 山 城 北	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 6 2 - 8 6 8 6
・ 山 城 南	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 7 2 - 0 2 3 7
・ 南 丹	農業改良普及センター	0 7 7 1 - 6 2 - 0 6 6 5
・ 中 丹 東	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 4 2 - 2 2 5 5
・ 中 丹 西	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 2 2 - 4 9 0 1
・ 丹 後	農業改良普及センター	0 7 7 2 - 6 2 - 4 3 0 8

京都府病虫害防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

－農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること－